

MATERIALIZATION

建築家・山本理顕

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco



■ 未来の夢をつくるのが建築

皆、尊敬と畏敬の念を覚えながら「りけん」とファーストネームで呼ぶ。メガネの奥は決して笑っていないが雰囲気は優しい。高名な建築家の山本理顕さんの登場である。実は「みちあき」さんが本名という。1945年中国は北京の生まれ。早くに父を失ない、薬剤師として働く母の姿を見ながら成長した。エンジニアになろうと考えたのはそんなところからか。日本大学理工学部で建築を専攻。「建築をつくることは、未来の夢をつくることだ!」と強く思った。興味をもったのは建築史で、建築史家の小林文次が教鞭をとっていたのが大きなきっかけだ。根底には、当時まだ生きていたコルビュジエやライトがつくり出す近代建築の発生の理由を探る想いもあった。3年で建築史研究会の“チーフ”になって、本格的に近代建築史の研究をはじめた。そのまま歴史の研究をしたいと思って、東京藝術大学大学院の山本学治研究室に進むが、待っていたのは大学紛争。波乱の中で、レヴィ=ストロースや吉本隆明に感銘を受けのめり込む。身近には藝大紛争で奮闘する北川フラムさんや元倉真琴さんもいて、山本さん自身は「ささやかに戦った」のでした。

社会人になってからのことを…と編集長が問うと、「ずっと社会人になりませんでしたので…」と煙に巻いた。日大の先輩には建築家の黒澤隆さんなども

いて、「影響を受けました」と懐かしいそぶり。修士論文は“沢山の住宅が集まった時の建築について”だったという。

■ 原広司の思想を継ぎたい

「東京大学原広司研究室での「集落調査」が自分をつくってくれた。原広司先生が恩師である」と語る。恩師は「自分がつくる建築で世界が変わる」と言った。確かに梅田スカイビル、京都駅ビル、札幌ドームなどで、世界を仰天させてきた。山本理顕さんは、その師の建築設計に対する精神を受け継ぎたいといいます。

つくった建築の施工では埼玉県立大学のプレキャストコンクリートが思い出に残る。構造設計は構造計画プラス・ワンの金田勝徳さんをお願いして、織本匠構造設計事務所と組んで行った。公立はこだて未来大学では、日本建築学会作品賞（2002年）を受賞。これは木村俊彦構造設計事務所の構造設計。当時、所員だった構造家の佐藤淳さんが担当者。佐藤さんは手弁当で現場常駐したという。木村俊彦先生から「もっと精錬できるはず!」と、打合せ中に叱責を受けるシーンを見たそうだ。山本さん以外の人は口にできない構造界の裏話であります。

■ 物申す建築家として

名古屋造形大学（2022年竣工）は、美術大学としての魅力に溢れている建築である。

大きな○=△+□のロゴが天井からぶら下がり領域を示す。2023年3月に山本さんがつくった本がある。『MATERIALIZATION 山本理顕的設計監理思想 生まれ変わる名古屋造形大学』（建築技術、2023年）。思想家のハンナ・アレントの言葉を引用して、山本さんが書いている文章が心に刺さる。“どのような考えも頭の中で考えているだけでは他者に伝わらない。行動する、声を出す。……そして物にする「物化」が必要である……。” ぞー読あれ、美文なのです。

知られるように、物申す建築家であり、闘う建築家。自身が設計した学校から学長の座を追われ、この地でも闘いが始まっている。

最後に、若手の設計者へひと言お願いした。「時を経て汚れないディテールを!」。“MATERIALIZATION”からその秘訣を学んで欲しいと望む「りけん」さんだ。